

特集 環境保全活動に 取り組むシニア世代

シニアとは何歳以上のことなのでしょう？ 明確な定義はありませんが、50～60代以降とするのが一般的なようです。少子高齢化が進む日本では、社会経験が豊富で確かな知識や技術を身につけたこの世代の活躍が期待されています。もちろん、それは環境分野でも同じ。本号では、環境保全活動の担い手として活躍するシニア世代と、まだ活動していない人をどのように巻き込んでいくか等について特集します。

3つの時代からなる予報の歴史 数値予報で飛躍的に進化

天気予報はその昔「観天望氣」と言っていて、例えば漁師さんが「あの山に雲がかかったから明日は風が強い」と言ったように、自然現象を見て天気を予想する時代が長かったんですね。これを、「俚諺（りげんりことわざ）時代」と言います。クリミア戦争中の1854年、黒海で最新鋭の軍艦が風で沈没。その原因を調査したパリ天文台長のルベリエは、風が地中海から黒海に移動したことを明らかにしました。これを契

Interview

お天気から考える温暖化。 シニアこそ環境負荷の少ない生き方を！

天気予報の精度が飛躍的に向上したことで、かつては救うことのできなかった命が助かるようになりました。その一方で、異常気象が原因と見られる災害が各地に大きな被害をもたらしています。身近なお天気と地球温暖化との関係、そして温暖化のリスクを回避するために私たちができることについて、気象予報士の森田正光さんにお話を伺いました。

巻頭インタビュー.....2

森田正光さん

お天気キャスター、気象予報士

オピニオン.....6

シニア世代が最前線で活躍するために

渡辺豊博さん

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長

活動レポート.....8

活動のカタチは様々、シニア世代の取組み

Partner's Talk／助成団体レポート.....10

特定非営利活動法人野外教育学修センター魚沼伝習館

NGO・NPOサポートプログラム紹介.....12

研修講座の活用

地球環境基金のサポーター.....14

地球環境基金をご支援くださった方々



【表紙写真】

静岡県三島市
「源兵衛川」

家庭からの生活排水やゴミ等一度は汚れてしまった源兵衛川。しかし、多くの市民による地道な環境保全活動により、現在は「水の都・三島」の清流のシンボルとなっています。環境省の「平成の名水百選」や農林水産省の「疎水百選」にも選定されています。

表紙写真:NPO法人グラウンドワーク三島提供

正確な予報で、気象災害から人命を守る。

特集

環境保全活動に
取り組むシニア世代



予報と観測は別の業務 観測には人の目が必要

私の敬愛する倉嶋厚先生いわく、予報官には地下室派と屋上派がいると。地下室派というのは、窓のない地下室で、外を見ずに数値データだけで

ましたが、このような知識は、こと予報に関して言えば、いらなくなってしまうでしたね。70年代くらいまでは、台風で漁船が転覆して何十人という方が亡くなっていましたが、いまの漁師さんたちは天気予報を非常に上手に利用しており、遭難事故は激減しています。そういう意味でも、数値予報の果たした役割は大きいと言えます。

93年に気象予報士制度が発足（95年予報業務の自由化）。この制度も数値予報と関係しています。つまり、コンピュータの予報で当たるのなら、そのデータの読み方の分かる人に気象予報士という資格を与えましょうと。豊富な経験なんていらない、コンピュータの予報をそのまま出せばいい。もちろん、確かな根拠があれば、気象庁と違う予報を出しても構いません。また、予報は「雨」だけれど、こういう状況になったら降らないかもしれないと、外れる可能性も含め、予報を修正していくのも気象予報士の仕事です。

森田正光さんの 主な活動

■サイエンスショー&出前授業

森田さんが代表を務める株式会社ウェザーマップでは、最も身近な科学の1つである「気象」をテーマに実験やクイズを交えたサイエンスショーや、お天気キャスターが都内の小学校に出向いて行う出前授業（NTTDコモ協賛）を実施している。この出前授業は、2011年6～11月、東日本大震災の被災地である福島県相馬市、岩手県釜石市、宮城県仙台市の小中学校11校でも行われた。

■「津波防災の日」ライブイベント

11年6月、津波対策推進法で11月5日が「津波防災の日」に決まった。この日をPRするために、森田さんが各局のお天気キャスターや気象予報士に呼びかけてイベントを開催。2回目の12年11月5日のイベントでは、「稲村の火」の紙芝居や被災地レポート等を通して、災害から身を守ることにについて語り合った。収益金は日本赤十字社に寄付。



森田さんが企画した演劇公演の収益金で建てられたスリランカ・ヒッカドワの幼稚園（スマトラ島沖地震の被災者支援）

世界の年平均地上気温は上昇しており、この傾向は80年ぐらいいから顕著です。100年後に気温が2～3度上がると、どうなるか？ 今、東京の年平均気温が15.9度、鹿児島が18.3度で、その差は2.4度。つまり、100年後には東京が鹿児島気温になってしまいう。東京―鹿児島間の南北距離は約460キロありますから、1年に4.6キロずつ北へ気候帯が移動する計算になります。4.6キロをどれくらいの時間で移動できるかと言うと、人間は1時間9分、ウサギ4分、カメ9時間。カタツムリは750時間かかるけれど、1カ月もあれば移動できます。ところが樹木は、マツ3年、クリ・ブナ5～25年、モミ100～150年と、ものすごくゆっくりでしか変化できません。1年に4.6キロという速度に対応できないので枯れてしまいます。実際に今、高山植物が枯れたり、お花畑がなくなったりしていますよね。木が枯れるということは、その木と共生している昆虫や爬虫類、小さなほ乳類

やりとりをしていると考ええると、自然はうまくできていると思いますね。

温暖化の最も怖いシナリオ それは生態系の破壊

予報するタイプ。屋上派は、やっぱり大気の状態を見なければと、屋上に出て予報するタイプ。私は予報については地下室派と決めています。というのも、人間は「晴れ」と予報をしたにも関わらず、外へ出てどんよりとした雲が出ているのを見ると、その瞬間にバィアスがかかり、「曇り」という予報に變更し空が曇るが、予報は必ずしも当たらない。予報とはまったく別の業務、観測が必要だ

からです。国内では2カ所を除き測候所が無人工化されてしまいましたが、これは非常に残念です。空を見て、どの高さにどんな種類の雲が出ていて、それがどのように変化しているかは、人間の目でしか観測できないからです。今外を見ると普通の曇りですが、この雲は高層雲で厚さが3000メートルぐらい。こういったことは、機械では測定できません。データで予報するからこそ、その元となる観測が大事。今観測技術はどんどん失われており、ま



講演会やトークイベントで、気象や防災を分かりやすく解説する森田さん

植物は急激な温度変化についていけない。

がいなくなるということ。植物が減びることによって、生態系が壊れてしまふというのが温暖化の最も怖いシナリオなのです。

シニアが率先したい 環境に負荷をかけない生き方

私たちは幸いにも日本という先進国で暮らしているのですから、環境に負荷をかけない生き方を選択することができるはずです。シエールガスが出て、ここ何百年はエネルギー問題は大丈夫だと言われますが、石油と同じように無節操に使いますか？ 私は、そこに歯止めをかけるのが温暖化問題だと思うのです。シエールガスも使えばCO₂が排出されます。思想と言うにはおこがましいけれど、私たちの価値観が問われるのではないのでしょうか。例えば「暴力はいけない」

た天気図を描く必要がないので、天気図を上手に描ける人も少なくなっています。

※倉嶋厚（くらしまあつし）…気象庁退官後、テレビで気象キャスターとして活躍。

自然はアンバランスが嫌い 異常高温と集中豪雨の関係

最近、異常気象という言葉がよく使われますが、これには決まりがあつて「30年に1、2回の頻度で起こる現象」のことを指します。現在、異常気象は20～30年前に比べて3倍起こりやすくなっています。例えばこの3年間、東日本では猛暑が続いていますが、今年も猛暑で4年連続となると統計史上、例がありません。

異常高温と関連して増えているのが



東日本大震災の被災地・釜石で開催した「お天気キャスター出前授業」の様子

集中豪雨。1時間降水量80ミリ以上の集中豪雨の発生回数を見ると、81～90年は平均11.9回でしたが、01～10年には平均16.4回と明らかに増えています。では、異常高温になると、なぜ集中豪雨が増えるのか？ 地上の気温が高くなり上空の気温との温度差が大きくなると、自然はアンバランスを嫌うので、温度が高いところと低いところを一緒にして平均化しようとしています。その時に集中豪雨が起きる。雨を降らせることで温度の勾配が広がるのを防ぐとするんですね。皆さんは台風を嫌いますが、台風は熱帯の熱を北に運ぶ「熱の輸送機」。台風がなかったら南は人が住めないくらい暑くなるし、逆に北は寒くて仕方がない。台風で熱の



「津波防災の日」をPRするライブイベント

とか「ルールを守る」等、私たちが一定の社会規範や価値感を共有しているように、環境問題についても、そういった普遍的な価値観が求められていると思います。

「もったいない」ということをよくご存知のシニアの方にこそ、率先して環境に負荷をかけない生き方を実践し、それを周囲に伝えていただきたい。また、冒頭で総観気象学はもはや役に立たないと言いましたが、役に立つ・立たないは別として、自分が得た知識や経験を次世代に伝えていくこともお願いしたいと思っています。私もテレビに出始めて迷っていた頃、先輩から「いったん口に出したことは、理由もなく変えるな」「ひょうひょうとやればいい」等のアドバイスをもらいました。シニアの皆さんの生き方や一言が、後輩の進むべき道を照らしてくれると思います。

森田正光さんの プロフィール

1950年愛知県生まれ。財団法人日本気象協会を経て、92年初のフリーお天気キャスターとなる。同年、気象予報会社・株式会社ウェザーマップ、2002年に気象予報士受験スクール・株式会社クリアを設立。05年日本生態系協会理事に就任し、10年からは環境省が結成した生物多様性に関する広報組織「地球いきもの応援団」のメンバーとして活動。現在はテレビ・ラジオ出演のほか、全国で講演活動も行っている。

■生態系を保全する取組み

森田さんは、理事を務める日本生態系協会です。手つかずの自然林を残す活動に取り組んでおり、「人が一切立ち入らず、誰も何もしない領域を残すことが最高の賛沢」と語る。

・公益財団法人日本生態系協会
http://www.ecosys.or.jp

・国連生物多様性の10年日本委員会「地球いきもの応援団」
http://undb.jp/committee/team/cheering/